

中核(core)から周辺(periphery)まで

—英語、日本語、中国語、アジュクル語、マラーティー語の関係節形成—

王路明 パルデシ・プラシャント 堀江薫

東北大学大学院国際文化研究科

wangluming@insc.tohoku.ac.jp prashant@lbc21.jp khorie@inctul.tohoku.ac.jp

1. はじめに

言語類型論の分野では、名詞句の関係節形成の可能性は「主語>直接目的語>間接目的語>斜格」という「接近可能性階層」(Accessibility Hierarchy, 略称 AH)に従うとされている(Keenan and Comrie 1977)。井上(1976)はこの階層の「斜格」をより細分して日本語の関係節形成が以下の順位に従うと提案した(一部修正: 王、パルデシ、堀江): 主格>直接目的格>間接目的格>位置格「に」>位置格「を」>目標格「に」または「へ」>位置格「で」>助格「で」>奪格>所有格>起点格>随格>理由格>比較格

本研究では、英語、日本語、中国語、アジュクル語¹とマラーティー語の関係節形成の調査を通して、これらの階層の普遍性を検証し、その背後にある認知・機能的な原理を考察する。

2. AHの普遍的階層と関係節形成の手段

Keenan and Comrie (1977) は世界の諸言語を調べ、主要部名詞句が関係節内で担っている文法関係が「主語」である場合が通言語中で最も関係節を形成しやすく、AHの下位の文法関係に行くほど関係節が形成しにくくなる傾向があることを明らかにした。また、同じ言語においても、AHの下位の名詞句は関係節が形成できれば、上位のすべての名詞句も関係節が形成できるという含意的普遍性を提示した。

¹ 象牙海岸国の現地語でニジェール・コンゴ語族に属する。

また、Comrie (2002)では、関係節内に主名詞の役割をコード化する手段(例文では下線で表示)を(1)のような最も明示的な手段から(4)のような最も非明示的な手段への四種類に分類した(例文は Comrie 2002: 19)。

(1) 非縮約型 (Non-reduction type)

[With which knife the man killed the chicken], Ram saw that knife.

(2) 代名詞残留型 (Pronoun-retention type)

I saw the woman [that Hasan gave the potato to her].

(3) 関係代名詞残留型 (Relative-pronoun type)

The fox saw the rabbit [with whom the chicken danced].

(4) 空所型 (Gap strategy)

The man saw the chicken [the fox had killed Ø].

また、Comrieによると、ある言語が複数の関係節化の手段を持つ場合、AHの下位へ行くほど、より明示的な関係節形成の手段を求められるという普遍的傾向があるという。本研究は、このComrieの観察に着想を得ている。

3. 調査

本節では井上が提案したAHに沿って、日本語とは異なる語族に属する五言語の関係節形成を調べた。

3.1 必須格の関係節形成(「主格」、「直接目的格」と「間接目的格」)

英語では、主格と直接目的格が関係節形成さ

れる時、(4)のように空所型を使うが、間接目的格は関係代名詞残留型になる。

(5) the student [to whom the teacher gave the book]

一方日本語は主格から間接目的格まで空所型の関係節が用いられる。例文(6)を参照されたい。

(6) [先生が \emptyset 本を あげた] 学生

中国語では関係節がマーカーの「de」によって主名詞に繋がる。主格と直接目的格は、例えば(7)のように空所型が用いられる。

(7) [zhege nvhai du \emptyset de] shu

この 女 読む RE 本

「この女が読んだ(読む)本」

これに対して間接目的格が関係節形成される時は(8)のように代名詞残留型になる。

(8) [laoshi gei ta shu de] xuesheng

先生 あげる 彼/彼女 本 RE 学生

「先生が彼/彼女に本をあげた(あげる)学生」

マラーティー語では主格から間接目的格まで、非縮約型、関係代名詞残留型、空所型という三つの手段を持っている。主格の関係節を例にとると、これらは(9), (10), (11)のように示される。

(9) [dzaa-baa-ne te pustak waatsla] ti baai

REL-女-ERG その 本 読んだ COR 女

(10) [dzi-ne te pustak waatsla] ti baai

REL-ERG その 本 読んだ COR 女

(11) [\emptyset te pustak waatsleli] baai

その 本 読んだ 女

「本を読んだ女」

アジュクル語では関係節が主名詞の後に来ており、普通両者の間にマーカーの「èké」が介在する。この言語は主格から間接目的格まで空所型が使える。(12)は間接目的格の例である。

(12) jów nà [èké íg] nà òj \emptyset lè à]

女 その RE 男 その あげた 本 その
「その男が本をあげた女」

3.2 斜格の関係節形成(「位置格」から「比較格」まで)

英語は位置格から比較格(例文(13))まで関係代名詞残留型が適用できる。

(13) the man [whom Guy is taller than]

日本語は「位置格」から「所有格」まで空所型が使えるが、起点格になると空所型が使えなくなり、代名詞残留型を用いる。(14)は所有格、(15)は起点格の例である。

(14) [\emptyset 息子が 医者である] 人

(15)? a. [彼が \emptyset 出発した] 駅

b. [彼が そこから 出発した] 駅

また随格と理由格は関係節形成しにくくなり、比較格は完全に関係節化できなくなる。

中国語は位置格から助格までまた空所型を使い、奪格から起点格まで代名詞残留型である。

(16)は助格で、(17)は奪格の例である。

(16) [nage ren \emptyset xie xin de] gangbi

その 人 書く 手紙 RE ペン

「彼が手紙を書いた(書く)ペン」

(17) [wo xiang ta jie shu de] ren

私 に 彼/彼女 借りる本 RE 人

「私は彼/彼女に本を借りた(借りる)人」

マラーティー語では奪格から比較格まで空所型が使えなくなり、関係代名詞残留型と非縮約型は比較格まで適用できる。(18)は奪格で、(19)は比較格である。

(18)*a. [mi \emptyset paise udhaar ghetlelaa] maaNus

私 お金 借り 取った 男

b. [mi dzyaa- \emptyset caakaDun paise udhaar

私 REL- \emptyset -から お金 借り

ghetle] to maaNus

取った COR 男

c. [mi dzyaa-maanNsaa-kaDun paise udhaar

私 REL-男-から お金 借り

ghetle] to maaNus

取った COR 男

「私がお金を借りた男」

(19) *a. [raam Ø uncaas-lel-aa] mulgaa

人名 高いである 男の子

b. [raam jaa-Ø-caa-pekshaa unca aahe]to mulgaa

人名 REL-Ø-の-より 高いである COR 男の子

c. [raam jaa-mulaa-pekshaa unca aahe]to mulgaa

人名 REL-男の子-より 高いである COR 男の子
直訳:「ラムが(その男の子より)高いであるあの男の子」

アジュクル語は位置格から助格まで空所型が使われるが、その際に関係節のマーカが変わる現象が見られる。位置格「に」、目標格と起点格は「èké」が介在する空所型であるが、位置格「で」、位置格「を」、助格と理由格に相当する位置での関係節形成には「èké」より「âna ké」のほうが自然である。(20)は位置格「で」に対応する例である。

(20) ódʒ ém à [âna ké íg] à èrú és] (à)

room in the it is that man the slept VPart DEF

「それはその人が寝た部屋」

奪格、所有格、随格と比較格は「èké」が介在する代名詞残留型を使う。(21)は比較格の例である。

(21) íg] à [èké gī agb àkmì ìn](à)

男 その RE 人名 高い超える 彼 DEF

直訳:「ギーが(彼より)高い男」

今まで見た各言語の関係節形成の可能性と手段は図1にまとめることができる。

図1に見られるように、英語、日本語、中国

語とマラーティー語の関係節形成は一定の連続的な階層を示す。

また、各言語が複数の関係節形成の手段を持っている。英語、日本語と中国語は(4)の空所型から(3)の関係代名詞残留型あるいは(2)の代名詞残留型に切り替えることから、AHの下位に行くほど、主要な手段の代わりにより明示的な手段が求められるということが分かる。しかし、マラーティー語の主語の関係節形成は三つの手段があるので、いずれが主要な手段であるか必ずしも明確でないため、「主要な手段」の再定義が必要になる。

また、井上が提案した通り、日本語では斜格の内部にも階層が存在する。しかし、それは日本語だけではなく、英語、中国語とマラーティー語にも見られるものである。次節では、通言語的に見られる斜格内の階層性に認知・機能的な観点から説明を加える。

4. 中核(core)から周辺(periphery)へ

認知・機能言語学の分野では、人間は外界から受け取った情報をカテゴリーとして認識するとされている。カテゴリーのメンバーはすべて同じ位置につけるのではなく、最も典型的なメンバー(中核(core))から周辺的なメンバー(周辺(periphery))まで連続的に分布している。典型的なメンバーであるほどその情報を処理する時間が速く、習得も早いとされる。(Givón 1995などを参照)。

必須的な要素(項)は、周辺的な要素(付加語)に比べて、その生起の予測可能性が高く、明示的なコード化の手段が必要とされないということが指摘されている(Givón 1995, Horie 2000)。

この認知・機能的原理は関係節形成においても観察される。即ち、必須格でマークされる名詞句は典型性、予想可能性が高いため、非明示

	必須格			斜格											
	主格	直接 目的	間接 目的	位置 格に	位置 格を	目標	位置 格で	助格	奪格	所有	起点	随格	理由	比較	
英	(4)	→	(3)	→											
日	(4)	→							(2)	-----→					
中	(4)	→	(2)	(4)	→			(2)	→		-----→				
マ	(4)	→													
	(3)	→													
	(1)	→													
ア	(4)	→						(2)	→	(4)	(2)	(4)	(2)	(4)	(2)

図1. 英・日・中・マラーティー・アジュクル語の関係節形成

(1)-(4)の番号は2節で述べた関係節形成の手段を示す)

的な手段によってコード化される。例えばマラーティー語では三つの関係節化の手段が共存する場合、空所型が優先である。これに対して周辺の斜格は、予想可能性が低く、認知的な負荷が高いため、コード化するためにより明示的な手段に頼る必要がある。また、「中核」と「周辺」の間は連続的であるため、その中間に位置する格はコード化に必ずしも明示的な手段を要求されない。例えば、位置格は日本語、中国語、マラーティー語とアジュクル語において、必須格とほぼ同じ手段によってコード化される。一方、周辺の格ほど、より明示的な手段が要求され、言語間の変異の幅も大きくなるものと考えられる。

5. おわりに

本研究では、英語、日本語、中国語、アジュクル語とマラーティー語の関係節形成の接近可関係節の形成を考察した。今後、斜格の関係節によるコード化の普遍性に関する類型論的な考察を深めていきたい。

謝辞

本研究は、東北大学 21 世紀 COE プログラム (人文科学)「言語・認知総合科学戦略研究教育拠点」の補助を一部受けて行われています。

また、アジュクル語の母語話者 Kaul Guy 氏と類型論的考察に関して助言をいただいた角田太作氏に感謝いたします。

参考文献

- Comrie 2002. Typology and Language Acquisition: The Case of Relative Clauses. In A. Giacalone Ramat (ed.), *Typology and Second Language Acquisition*. Berlin: Mouton de Gruyter: 19-37
- Givón, Talmy. 1995. *Functionalism and Grammar*. Amsterdam: John Benjamins.
- Horie, Kaoru. 2000. Core-oblique Distinction and Nominalizer Choice in Japanese and Korean. *Studies in Language* 24.1, 77-102.
- Keenan, Edward L. & Bernard Comrie. 1977. Noun Phrase Accessibility and Universal Grammar. *Linguistic Inquiry* 8: 63-99
- 井上和子 1976.『変形文法と日本語・上』東京: 大修館書店